慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奴隷商人と西部移住 : アンティベラム期アメリカ南部における奴隷取引と商人ネットワーク
Sub Title	Slave traders and Western migration : the domestic slave trade and trading network in the antebellum South
Author	柳生, 智子(Yagyu, Tomoko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.2 (2002. 7) ,p.265(75)- 289(99)
JaLC DOI	10.14991/001.20020701-0075
Abstract	19世紀初頭のバージニア州リッチモンドを拠点に、奴隷商人バラードは地元の商人層との連携を強めつつ取引規模を拡大し、やがてニューオリンズの南部最大級の奴隷取引業者とパートナーシップを設立した。取引による富を元にバラードは西部に移住し、プランター兼商人として成功した。バラード文書には取引や商人の特徴が記され、奴隷取引がプランターや商人に多大な影響を持つ南部の資本形成や経営戦略上欠かせない活動として西部奴隷制経済の進展を支えたことが分かる。 Ballard, a slave trader based in Richmond, VA in the early 19th century, expanded the trade volume by strengthening alliances with local merchants and eventually established a partnership with one of the largest slave trading companies in the South, located in New Orleans. With the wealth accumulated through trade, Ballard migrated to the West and became a successful planter merchant. The Ballard document records the characteristics of domestic slave trade and slave merchants, revealing that domestic slave trade helped the expansion of the Western slave economy through capital formation in the South. It was a strategically vital economic activity that significantly impacted southern planters and merchants.
Notes	小特集 : フロンティアの比較研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020701-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奴隷商人と西部移住 ―アンティベラム期アメリカ南部における奴隷取引と商人ネットワーク―

The Frontier in Comparative Perspective
Slave Traders and Western Migration：The Domestic Slave Trade and Trading Network in the Antebellum South

柳生 智子(Tomoko Yagyu)

19 世紀初頭のバージニア州リッチモンドを拠点に、奴隷商人バラードは地元の商人層との連携を強めつつ取引規模を拡大し、やがてニューオリンズの南部最大級の奴隷取引業者とパートナーシップを設立した。取引による富を元にバラードは西部に移住し、プランター兼商人として成功した。バラード文書には取引や商人の特徴が記され、奴隷取引がプランターや商人に多大な影響を持つ南部の資本形成や経営戦略上欠かせない活動として西部奴隷制経済の進展を支えたことが分かる。

Abstract
Ballard, a slave trader based in Richmond, VA in the early 19th century, expanded the trade volume by strengthening alliances with local merchants and eventually established a partnership with one of the largest slave trading companies in the South, located in New Orleans. With the wealth accumulated through trade, Ballard migrated to the West and became a successful planter merchant. The Ballard document records the characteristics of domestic slave trade and slave merchants, revealing that domestic slave trade helped the expansion of the Western slave economy through capital formation in the South. It was a strategically vital economic activity that significantly impacted southern planters and merchants.

「三田学会雑誌」95巻2号（2002年7月）

奴隷商人と西部移住

――アンティベラム期アメリカ南部における奴隷取引と商人ネットワーク――

柳　生　智　子

要　　旨

19世紀初頭のバージニア州リッチモンドを拠点に，奴隷商人バラードは地元の商人層との連携を強めつつ取引規模を拡大し，やがてニューオーリンズの南部最大級の奴隷取引業者とパートナーシップを設立した。取引による富を元にバラードは西部に移住し，プランター兼商人として成功した。バラード文書には取引や商人の特徴が記され，奴隷取引がプランターや商人に多大な影響を持つ南部の資本形成や経営戦略上欠かせない活動として西部奴隷制経済の進展を支えたことが分かる。

キーワード

アメリカ南部経済史，奴隷制，奴隷取引

はじめに

本稿の目的はアンティベラム期アメリカ南部における地域内奴隷取引の実態と南部奴隷制経済の関係を奴隷商人の史料から理解することにある。国内市場開拓と西部移住に特徴づけられるこの時代において奴隷取引商人（トレーダー）の特徴と，彼らを取り巻く経済状況を理解し，彼らの経済的地位と経営のあり方が奴隷取引と関わることでどのように変化したかを史料から考察する。更に，バージニアの奴隷商人にとって取引に関わること，及び西部移住の意義を個別の事例から検証する。(1)

奴隷取引が南部経済に多大な効果があったことは一部の地域や個人の史料分析から理解することができる。これは奴隷数が農業生産に必要な数をはるかに上回り，奴隷の州外への流出が最も多かったバージニア州の史料では特に顕著である。個別の事例の分析は，奴隷取引が重要度を増すにつれ，商人の経営のあり方やプランテーション経営にも変化をもたらしたことを示すことができる。

地域内奴隷取引についてはこれまで数多くの研究者が関心を示してきた。過去の研究では奴隷制

（1）　本稿は2001年6月湘南国際村で開催された「フロンティア研究会」において報告した内容に加筆を行ったものである。フロンティア研究会の会員の方々，報告時に有益な示唆を頂いた諸氏にここで感謝申し上げたい。

経済の収益性を支える活動としての分析や，奴隷とプランターの西部移住のパターンという側面から，それぞれ計量的分析手法を用いる方法などが見られた。こうした研究は奴隷価格や取引規模，奴隷人口の西部への拡大過程の説明などに成果をあげ，取引の総合的な理解に意義があった。(2) 一方，タッドマンの奴隷取引の詳細な研究はバンクロフトの説を継承し，奴隷商人を介した売却が奴隷の西部移住の過半数を占めていたことを主張した。彼の研究は奴隷取引の研究では最も支持されている説であり，本稿もその解釈と同意する点が多い。(3) 最近ではジョンソンの研究に代表されるように，元奴隷の証言等の史料を用い，関わった奴隷の視点を中心とした研究も増えている。(4) 本稿では両方の研究成果を踏まえつつ，奴隷取引という一つの経済活動と西部の発展がどのように関連していたか，個別の奴隷商人やプランターがどのような影響を受け，どう対応していたかを事例を通して考察する。

地域内奴隷取引は南部内での土地と労働生産力の相違を均衡させるために奴隷商人が仲介となり，東部海岸地域から開拓が進む西部地域へ奴隷を強制移住させる経済活動であり，奴隷取引市場は南東部，南西部を一つの市場に結びつけるだけでなく，全国の金融機関を包含した。奴隷取引市場は西部での奴隷価格が東部での穀物生産状況や北部あるいはヨーロッパの需要状況に左右されるなど，複雑なシステムのもとで機能していた。(5) バラード文書の各事例から，奴隷取引と西部綿花生産が隆盛するに従い，より多くの商人やプランターが奴隷市場の影響を受けるようになり，それに対応できる合理的な経営のあり方を求めるようになったことが伺える。取引の南部経済への影響力は拡大

---

(2) 例として，Alfred H. Conrad and John R. Meyer, "The Economics of Slavery in the Antebellum South," *Journal of Political Economy* 66 (1958); Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (Boston: Little Brown and Company, 1974), Richard Steckel, "The Economic Foundations of East-West Migration During the 19th Century," *Explorations in Economic History* 20 (1983) などがある。

(3) Frederic Bancroft, *Slave Trading in the Old South* (New York: J.H. Furst Company, 1931) は最初の本格的な奴隷取引の研究書であり，Michael Tadman. *Speculators and Slaves: Masters, Traders, and Slaves in the Old South* (Madison: University of Wisconsin Press, 1989), が出版されるまでは唯一の総括的な研究であった。

(4) Walter Johnson, *Soul By Soul: Life Inside the Antebellum Slave Market* (Cambridge: Harvard University Press, 1999). ジョンソンの研究はこれまでの奴隷制度の歴史を奴隷の視点から扱った各研究と符合する。代表的なものに John W. Blassingame, *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South* (New York: Oxford University Press, 1972), Herbert G. Gutman, *The Black Family in Slavery and Freedom*, 1750-1925 (New York: Vintage Books, 1976), 最近では Edward E. Baptist, ""Cuffy," "Fancy Maids," and "One-Eyed Men": Rape, Commodification, and the Domestic Slave Trade in the United States," *American Historical Review* (December, 2001) がある。

(5) 一つの市場としての奴隷市場の機能については Gavin Wright, "Slavery and the Cotton Boom," *Explorations in Economic History* 12 (1975) "The Efficiency of Slavery: Another Interpretation," *American Economic Review* 69 (1979).

を続けたことから，その意義と重要性は南部経済を研究する上で欠かせない要素であると言える。

本稿は奴隷取引の中心地域の一つであったバージニア州の奴隷商人，ライス・C・バラードと彼の文書に着目する。[6] バラードは1820年代にリッチモンドを拠点とする奴隷商人となり，1830年代初頭までには地元の商人層や他の奴隷取引業者と連携を強めつつ，東西を結ぶ大業者とパートナーシップを設立するまでに取引規模を拡大させる。このパートナーシップと地元の商人との連携により形成された取引のネットワークは，バラードが後に西部に移住しプランター兼商人として成功する重要な要因となる。バラード文書に登場する個人の事例はこの時期の多様な経済変化の象徴として見ることができ，これらのパターンの比較分析は南部における商人の地位，土地所有，西部移住等の問題を考察するときに効果的である。バラード文書の事例での発見を南部経済，商人及びプランターの経営の変化といった問題の中でとらえていくことが最終的な課題であり，経済変動への商人やプランターの対応や，より安定した収入を確保するために奴隷取引への依存度を高めていく過程は個別の事例分析が有効である。

バラードの記録は彼が優れた経営戦略を持った商人であり，その経営方針を西部に移住後のプランター生活に適用することができたことを示している。彼は奴隷商人としての地位を固めていく中で富を蓄積し，パートナーシップ設立で得た取引のネットワークを利用できたため，西部移住を実現できたと言える。バラードとは対照的に，バージニアに留まった商人たちの記録は，彼らがいかに経済活動を多様化させていったかを示している。

本稿では最初に奴隷取引が定着するまでの南部経済の概略を説明する。その後，バラード文書の事例を取り上げ，奴隷商人の特徴，更に奴隷取引の機能について分析する。後半は奴隷商人と西部移住の問題を各事例や研究史に沿って考察する。

1　奴隷取引定着の背景

タバコ生産が17・18世紀のバージニア経済を形成した。初期タバコ経済はステープル理論が適用できる輸出作物であったが，18世紀末までに地域経済はタバコ経済の停滞で経済的危機を迎え，モノカルチャー経済から多様化経済へと移行していた。[7] タバコ生産に伴うリスクの増加から，19世紀までに多くの農民はそれまでの生産活動の変化を強いられ，国際市場での需要に支えられ拡張を続ける綿花生産の中心地である南西部へ移住した。西部へ移らずバージニアに留まった農民は，収入と経済的地位を保持するために農業生産を多様化させ，新たな技術の導入や品種改良等によって生産力向上を目指した。移住せず，生産方法も継続した農民は最も厳しい状況に陥った。[8] バージニア

(6)　Rice C. Ballard Papers, University of North Carolina at Chapel Hill, Southern Historical Collection 所蔵。

州の経済は1820年までに長期の不況に陥り，1821年の恐慌では多くの州民が経済的に破綻した。このような状況で，奴隷取引に関わることは奴隷所有者にとっては不況のタバコ市場で減少した収入を補うために容易に選択できる活動であった。アンティベラム期までにバージニア州内の奴隷人口は農業生産に必要な数を超えていたため，奴隷取引市場は急速に拡大していった。

奴隷貿易と奴隷取引は植民地時代から行われていたが，その特徴は時代とともに変化した。独立前は大西洋貿易の一環として行われ，奴隷取引に関わる商人たちは他の商品を扱う商人同様，社会的に高い地位であると認識されていた。植民地時代までに取引されていた奴隷はそのほとんどがアフリカ生まれであったが，19世紀になると奴隷貿易はそれまでの北部主導ではなくなり，取引される奴隷もほとんどがアメリカ南部生まれであった。急速に増加した奴隷商人も，社会的・政治的地位は高くはなかった。とりわけこの時期の最も重要な変化は1808年に決定したアフリカからの奴隷の直接輸入の禁止であった。(9) 18世紀末に生産が急増した綿花は規模の経済で特徴付けられる労働集約的な作物であり，土地が豊富な西部では綿花生産の収益性は労働者数で決定付けられるものであった。西部での綿花地域の拡大に伴い，奴隷労働力の需要は激増した。

19世紀になるとバージニア州，特にチェサピーク湾岸地域は植民地時代の奴隷貿易の南部の拠点として発展したチャールストンを超える奴隷売却の中心地となった。(10) これは1790年の時点で全国の

---

(7) バージニアとチェサピーク湾岸地域でのタバコ生産は独立革命の直前に2度目の輸出急騰期を迎えたが，革命後，イギリスからヨーロッパ大陸への再輸出市場の縮小でタバコ出荷量と価格は激減した。Jacob M. Price, *Capital and Credit in British Overseas Trade: The View from the Chesapeake, 1700-1776* (Cambridge: Harvard University Press, 1980), Alan Kulikoff, *Tobacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986) Part 1. ステープル理論については Jacob M. Price, "The Transatlantic Economy," in *Colonial British America: Essays on the New History of the Early American Era*, eds., Jack P. Greene and J.R. Pole (Baltimore: Johns Hopkins University Pres, 1984), 24-42 と Lou Ferleger ed., *Agriculture and National Development: Views on the Nineteenth Century* (Ames: Iowa State University Press, 1990), 121-122 参照。タバコ経済から穀物生産圏への移行は Allan Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, part 1, Lois Green Carr, Philip D. Morgan, and Jean B. Russo, eds., *Colonial Chesapeake Society* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988); Paul G. E. Clemens, *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore: From Tobacco to Grain* (Ithaca: Cornell University Press, 1980).

(8) Lorena S. Walsh, "Slave Life, Slave Society and Tobacco Production in the Chesapeake, 1620-1820," in *Cultivation and Culture: Labor in the Shaping of Slave Life in the Americas*, eds., Ira Berlin and Philip D. Morgan (Charlottesville: University Press of Virginia, 1993), 192-199.

(9) 奴隷取引の特徴の変化は Steven Deyle, "The Irony of Liberty: Origins of the Domestic Slave Trade," *Journal of the Early Republic* 12 (1992) が詳しい。Wendell Holmes Stephenson, *Isaac Franklin: Slave Trader and Planter in the Old South* (Baton Rouge: Louisiana State University, 1938), 22 もあわせて参照。

(10) チャールストンも奴隷売却地の中心としての役割は続く。Tadman, *Speculators and Slaves*, 第2，3章，Bancroft, *Slave Trading in the Old South*, 第8章。

黒人人口の半分以上はメリーランドとバージニアの両州にいたこと，南部の全奴隷人口の45%はバージニア州にいたことなどを考えると必然の結果である。この時期までにバージニアでは小麦など穀物生産が多くのプランテーションで取り入れられていたが，穀物生産はそれまでのタバコと比較すると必要な奴隷数が少ないため余剰奴隷が増加した。奴隷の需要は西部綿花地帯にあったため，東部から西部へ奴隷を移動させる方法の確立が急務であった。バージニアの州民は余剰奴隷がバージニアの州経済と社会に悪影響を及ぼすと懸念していたため，最も奴隷取引を奨励した州でもあった。奴隷所有が重要な資産形態である地域においては，その動産価値を維持するために奴隷を増やさず，余剰人口の移出先を設けることが価格の安定のために最も重要であった。[11] バージニアの奴隷市場の中心として発展した都市はリッチモンド，ボルチモア，アレクサンドリア（コロンビア特別区）などであった。[12]

上に見るように，奴隷の西部移住は東部諸州の経済状況に深く関連しており，移住の形態はプランターとともに移住するか，奴隷取引による移動かのいずれかの方法が取られた。[13] 専門の奴隷取引商人が市場を独占し始めるのは19世紀以降であるが，18世紀末には西部の奴隷購入を扱う商人が定期的にバージニアに入り，発達しつつあった都市部の市場で購入を始めていた。1810年までにはバージニアとメリーランド両州の主要都市では州間奴隷取引に関わる専門の奴隷商人が拠点を持つようになっていた。研究史では，1810年頃まではプランターとともに移住した奴隷も多かったとされるが，その後は奴隷商人による移動が急増する。これは1812年戦争後激増する西部移住の中に，より小規模なプランターや農民が多くをしめていたためである。[14] 1820年代から1860年にかけては10年ごと数十万人規模で奴隷が東部から西部へ移動したと推計され，この取引のかなりの部分は奴隷取引に特化した専門商人，あるいは数多い活動の一部として奴隷取引に携わる商人を介して行われた[15]（地図参照）。

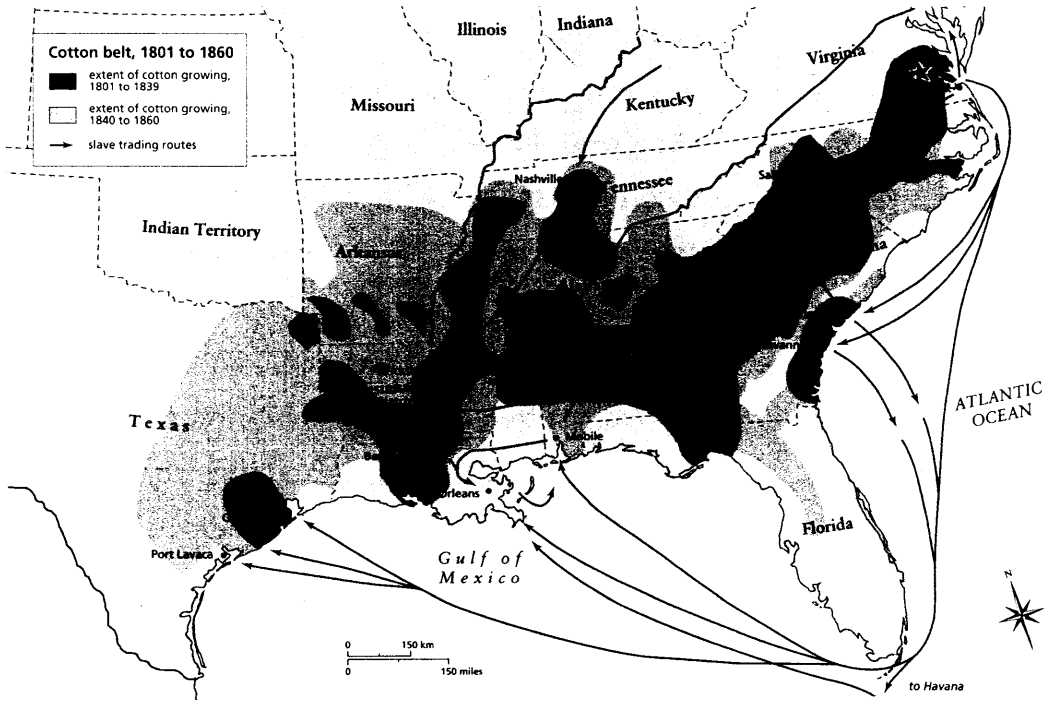
---

(11) Steven Deyle, "The Irony of Liberty: Origins of the Domestic Slave Trade," *Journal of the Early Republic* 12 (1992) 参照。タバコと小麦の必要労働量については Philip D, Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth Century Chesapeake and Lowcountry* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1998), 146-256.

(12) 東部都市における奴隷市場については Tadman, *Speculators and Slaves*, 47-82 参照。

(13) The 奴隷取引のパターンについてはこれまで多くの議論がされてきた。奴隷がプランターと共に移住したという解釈は Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on the Cross: The Economics of American Negro Slavery* (Boston: Little Brown & Co., 1974); や Winfield H. Collins, *The Domestic Slave Trade* (New York: Broadway Publishing Co., 1909) が代表的である。一方，奴隷移動の最も支配的な形式は専門の業者や商人を介した奴隷取引であると解釈する説は Bancroft, *Slave Trading in the Old South* (New York: J.H. Furst & Co., 1931) や Tadman, *Speculators and Slaves* に見られる。後者の方がより広範な史料に基づいており支持されている解釈であり，その説では西部へ移住した全奴隷の60%以上は奴隷取引商人によるものであったと推計されている。

地図　南部綿花地帯と奴隷取引ルート，1801-1860年



出典）Mark C. Cames, John A. Garraty and Patrick Williams, *Mapping America's Past: A Historical Atlas* (New York: Henry Holt and Co., 1996) 102.

注）★印が Richmond の位置。影の部分は綿花地帯の西部への拡大を示し，矢印は主な奴隷取引ルートを指す。

2　奴隷商人の特徴と事例の分析

ライス・C・バラードはバージニア州リッチモンドで1820年代に奴隷取引活動を開始した。彼の初期の取引は主にバージニアとノース・カロライナの両州で奴隷を購入し，ニューオーリンズかナチ

(14)　Tadman, *Speculators and Slaves*, 42－45, 245-247; Kulikoff, *The Agrarian Origins of American Capitalism*, 第8章参照。William Calderhead は奴隷取引による奴隷移動数は少なく，メリーランド州の例でそれを検証している。William Calderhead, "How Extensive was the Border State Slave Trade? A New Look," *Civil War History* 18 (1972). 小農民の西部移住については Avery Craven, "The Turner Thesis and the South," *Journal of Southern History* 5 (1939); James Oakes, *The Ruling Race: A History of American Slaveholders* (New York: W.W.Norton, 1982); John Hebron Moore, *The Emergence of the Cotton Kingdom in the Old Southwest: Mississippi, 1770-1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988), 15-17, 131-132.

(15)　Tadman, *Speculators and Slaves*, 56.

ェスの奴隷市場に売却するという形を取り，取引に関わり始めた初期の頃から近隣の商人兼プランターのサミュエル・アルソップと業務提携をしている。[16] ナチェスの新聞にバラードとアルソップの初期の奴隷売却に関する広告が出され，「奴隷販売。バージニアから到着したばかりの状態の良い奴隷60人をフランクリンホテルで販売。この中には家族用の第1級家内奴隷の他，良い鍛治師もいる。こうした熟練奴隷は特に売却を薦めることができ，現金か公認の手形で安値で売却する」と記載されていた。[17]

初期のバラードはアルソップとの提携（ライス・C・バラード・アンド・カンパニー）は確認できるが，西部への売却ネットワークを持つ大業者との提携はなかった。そのため，バラードとアルソップは東部での奴隷の購入と西部での売却の両方を行っていた。1820年代の間，バラードはアルソップやテイトなど地元の奴隷商人と緊密な関係にあり，特に同じく取引規模を拡大しつつあった奴隷商人，ベイコン・テイトとは競合関係にあったと考えられる。[18]

1831年にバラードは当時の南部最大級の奴隷取引業者であったニューオーリンズを拠点とするアイザック・フランクリンのフランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーとパートナーシップを設立したことが分かっている。アイザック・フランクリンはニューオーリンズ在住のプランター兼奴隷商人で，西部諸州，特にルイジアナとミシシッピの両州には売却用の奴隷を滞在させる奴隷用宿舎と奴隷売却専門の商人を多く抱え，バラードと業務を提携する以前からバージニア・メリーランド州内にも既に多くの奴隷商人を抱えていた。フランクリンとは親戚関係にあるバージニア州アレクサンドリア在住のジョン・アームフィールドはこれら東部の商人を統率する中心的立場にあり，東西ネットワークを支える共同運営者であったため，アレクサンドリアが東部の拠点となった。フランクリンの業者は拠点であるニューオーリンズの金融機関の成熟に頼り，取引規模とネットワークを拡大していった。このパートナーシップ設立後，バラードの奴隷取引数は大幅に上昇する。[19]

---

(16) サミュエル・アルソップに関しては付表参照。

(17) Ballard Papers, Series 1.1, Folder 1に広告原稿がある（新聞社は不明）。地元の新聞はトレーダーに広告掲載に最も利用され，新聞社側も広告料を多額に取れるため，掲載に積極的であった。Steven Deyle, "'By Far the Most Profitable Trade': Slave Trading in British Colonial America," *Slavery and Abolition* 12 (1992), 参照。

(18) ベイコン・テイトに関しては付表参照。

(19) バラードはこのパートナーシップによって奴隷の購入に特化した。バラード文書もフランクリンと連携して以降の史料が中心である。アイザック・フランクリンの人物像について詳しくはStephenson, *Isaac Franklin*, 第2章。ニューオーリンズ市場についてはTadman, *Speculators and Slaves*, 64-71; Stephenson, *Isaac Franklin*, 第6章。南西部の他の州と比較して，ルイジアナ州の金融状況は安定していたと言われる。特にGeorge D. Green, *Finance and Economic Development in the Old South: Louisiana Banking, 1804-1861* (Stanford: Stanford University Press, 1972) 第6章参照。

トレーダーの多くは1，2のカウンティーを担当地区として活動していた。トレーダーはある特定の街や村を拠点とし，その場で催される公共の奴隷オークションに行くこともあったが，実際の取引の多くはトレーダーが郊外のプランテーションに直接出向き，売却用の奴隷を探して取引が成立することが多かった。これはトレーダーにとっては担当地域のプランターの状況を把握するのに役立ち，交渉過程もスムーズに運ぶので好まれた。一方，奴隷の売却を希望するプランターにとっては都市部に奴隷を運び売却する面倒が省けるなどの利点があり，双方にとって最も都合の良い方法であった。[20]

バラードが拠点を置いたリッチモンドはジェームス川沿いにあり，ニューオーリンズとは特別な関係にあった。リッチモンドの奴隷市場としての特徴は，南部全体でみると植民地時代のチャールストン同様，主に奴隷を必要とする地域に奴隷を送り出すための供給の機能を果たしていた。リッチモンドは奴隷集積所兼売却所として，数多くの商人や有力なオークション業者が中心部で軒を連ねた。[21]

一方，ニューオーリンズ市場はとりわけ成人男性奴隷の需要がとても高いことが特徴であった。[22] チェサピーク湾岸地域とニューオーリンズ間の奴隷取引は沿岸の航海リンクが容易であったため，急速な発展が約束されていた（地図参照）。1830年の時点で，ある研究ではニューオーリンズに送られた奴隷の45%近くがバージニアから送られてきた奴隷であったと説明されている（表1）。[23] ミシシッピ州ナチェスはミシシッピ河沿いに位置する西部綿花生産の中心都市であり，奴隷取引の西部における第2の拠点に成長した。

奴隷取引業者は取引規模やパートナーシップの有無などによって大きく分けて3つに類型化できた。フランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーのように東西に商人を置き，東西奴隷移動のネットワークを確立しているのが最も大きな業者であった。フランクリン・アームフィールド社の規模の業者は，あまり多くは確認されていない。このような大業者と提携しているトレーダーはそれぞれ東部の売却地域から奴隷を都市部の奴隷用宿舎に集めることが多かったが，中には担当地域外のプランターが所有する奴隷を売却するため都市部に足を運ぶこともあった。小規模なトレーダーは彼らが集めた奴隷を地域内の大規模なトレーダー，特に西部へのネットワークの確立し

---

(20) 東部や市場でのトレーダーの奴隷購入のパターンについては Tadman, *Speculators and Slaves*, 47-82. 参照。

(21) リッチモンド市場の記述は Tadman, *Speculators and Slaves*, 57-64; Bancroft, *Slave Trading in the Old South*, 88-119 が詳しい。

(22) ニューオーリンズ市場で男性奴隷の需要が高かった要因は，ニューオーリンズ周辺部のプランテーションが砂糖生産中心であり，砂糖生産は男性奴隷の労働力をより多く必要としていたためと言われる。Walter Johnson, *Soul By Soul*, 序章，Herman Freudenberger and Jonathan B. Pritchett, "The Domestic United States Slave Trade: New Evidence," *Journal of Interdisciplinary History* 21 vol.3 (Winter, 1991) 447-477 参照。

(23) Freudenberger and Pritchett, "The Domestic United States Slave Trade," 473.

ている業者に奴隷の売却を委託する例が見られた。バラードの場合も，フランクリンと業務提携した後は，他のリッチモンド商人との間にこのパターンが見られた。売却用に集められた奴隷は集団で西部に送り出す一定数が集まるまで，奴隷用宿舎で滞在した。[24]

規模がやや小さい第2の類型の業者は売却地域か購入地域，いずれかのみを中心に活動していた。数人のトレーダーで業務提携をしている場合が多かったが，この規模の業者は大業者のような奴隷用宿舎を持たない場合が多かったため，委託販売を請け負う地域のオークション業者の奴隷用宿舎を利用することが多かった。

第3の類型，すなわち個人で取引を行うトレーダーが数の上では南部内で最も多く活動していた。彼らは売却地域を移動しながら奴隷を購入して歩き，ある程度の奴隷を集めた時点で都市の大業者に奴隷を売るか，購入地域である西部に移動して売り歩くかのいずれかを選択した。より広範なネットワークを持つ業者が増える中で，個人で取引を行っていたトレーダーの経済的状況は厳しく，収益の見込みは少なかった。史料からバラードはこの第3の類型から出発し，地元の商人アルソップと業務提携をした時点で第2の類型の属したと言える。更にフランクリンの業者とパートナーシップを設立したことでフランクリンらの第1類型と接点を持ち，この地域で第2類型に属するトレ

表1　ニューオーリンズへ送られた奴隷の出身州
"Certificates of Good Character" の記録より（1830）[25]

州	%
Alabama	2.3
Florida	0.3
Georgia	2.4
Kentucky	3.8
Maryland	15.4
Missouri	0.2
Mississippi	0.3
North Carolina	18.8
South Carolina	3.8
Tennessee	5.2
Virginia	44.4
District of Columbia	3.0

史料）Herman Freudenberger and Jonathan B. Pritchett, "The Domestic United Sates Slave Trade: New Evidence," *Journal of Interdisciplinary History* 21, vol.3 (Winter, 1991) 奴隷反乱を起こす人格でないことを示す証明書のデータより，N＝2289

(24)　奴隷用宿舎内の様子は Johnson, *Soul By Soul*, 第2章参照。

(25)　"Certificate of Good Character" は奴隷反乱をおこす人格でないことを示す証明書。Tadman, *Speculators and Slaves*, 88.

ーダーの中でも最も活動規模が大きい，最も利益を上げているトレーダーの1人になったと言える。西部に住むフランクリンは東西奴隷取引の知識と能力を持っていたので，バラードにとってフランクリンの業者との提携は取引を円滑にし，取引においてはバージニアでの供給側の役割に集中することができた。(26)

奴隷の移動は主に陸での移動であったが，大業者は自社の船を持ち，東部海岸の港からニューオーリンズに入り，ミシシッピ河を上ることが可能であった。フランクリンは自社の船を主にバージニアのノフォークから出港させ，ニューオーリンズに送っていた（87頁，表2参照）。東部から西部への奴隷の移動のコストに関しては，ノフォークからニューオーリンズへの船上でのコストを含めて奴隷一人あたり約17ドルという研究成果がある。更にトレーダーは奴隷の購入から売却までの維持費も払い，平均して約100日間の購入から売却までの期間は一日平均約25セントから34セントを要した。更に，取引費用や保険，地域外への資金の移転などのコストが合計して奴隷の価格の約5.5%と算出され，移動費用と維持費を含めると合計で奴隷価格の約13%負担があったとされている。奴隷一人あたりの負担が多額であったため，トレーダーは奴隷市場での価格変動や各種情報に非常に敏感になっていた。(27)

東部の売却地域での奴隷取引は夏から秋にかけて中心に行われた。10月から11月ごろに売却地域での購入はほぼ終了し，西部へ奴隷が移動し始めた。奴隷取引は季節周期的な活動であり，西部での収穫期にあたる秋から冬が購入地域の最も資金的に満たされている時期に当たるため，その収入状況によって奴隷の売却数が決定した。奴隷購入が本格化するこの時期までに，西部では次年度の作物生産を計画し，生産量を予想し，必要奴隷数を推察した上で奴隷を購入していた。ニューオーリンズの奴隷市場では1月から3月にかけての取引が最も活発であったが，他の市場ではその地域で生産される作物により，12月から取引が盛んに行われる例もあった。(28)

フランクリンの業者とのパートナーシップでは，バラードはバージニアで購入した奴隷をリッチモンドに集めた後，ニューオーリンズかナチェスに送り，フランクリンと西部在住のトレーダーたちがその奴隷の売却を担当した。一般的に，フランクリンが西部での奴隷市場の状況を把握してから，バラードら東部のトレーダーに奴隷購入のために小切手を送り，最終的な奴隷売却の利益からバラードらの分の収入が支払われていた。フランクリンは取引の全体を指示する役割を担い，西部

---

(26) Deyle, "The Irony of Liberty," 60-65.; Robert Evans Jr., "Some Economic Aspects of the Domestic Slave Trade, 1830-1860," *Southern Economic Journal* 27 (1961): 329-337. フランクリンはテネシー州にもプランテーションを持ち，ルイジアナとテネシーを頻繁に行き来していたことが確認されている。

(27) Freudenberger and Pritchett. "The Domestic United States Slave Trade," Robert Evans, "Some Economic Aspects of the Domestic Slave Trade, 1830-1860," *Southern Economic Journal* 9 (1961) 参照。

(28) 奴隷購入と売却の季節周期について Tadman, *Speculators and Slaves*, 第4章参照。

での需要に応じてバラードに手紙でどのような奴隷を購入し，どれだけの奴隷を西部に送るかを細かく指示していたことが分かる。1833年11月1日のフランクリンからバラードあての手紙には「この手紙を受け取った後の最初の船で全ての第1級の家内奴隷を送るように。あなた（バラード）に20,000ドル，アームフィールドには30,000ドルを送金する」と書いた。[29] また，西部の市場における奴隷価格の相場を東部のトレーダーらに通知することも，フランクリンの役割であった。フランクリンはニューオーリンズとナチェスにそれぞれ奴隷用宿舎を持っており，現在どれだけの奴隷を宿舎に持っているか，あと何人必要であるかをトレーダーに頻繁に知らせていた。1831年の手紙には「適切な価格でよい奴隷をなるべく多く購入したい。ここには20人ほどの奴隷しかおらず，いずれもあなた（バラード）の送ってきた奴隷だ。男性奴隷は500ドルから850ドルの間で売却されており，女性奴隷は575ドル前後であろう。奴隷が次々と川を下ってきており，ルイジアナ法が撤回されないかぎり現状の奴隷価格を維持するのは難しいと思われる」と記していた。[30]

上の手紙でフランクリンが述べているルイジアナ法は，ルイジアナ州内での奴隷売却を禁じた法律である。ルイジアナは1826年6月から2年間，更に1831年から1834年にかけて，州内での奴隷取引を禁じる法律を施行した。この法律制定の背景には経済的要因，つまり不況の最中に奴隷購入による資金が州外へ流出する事態を避けたい，という狙いがあった。実際，1820年代の州内奴隷取引禁止は1826年のルイジアナ州での不況の直後の制定であった。一方，1830年代の禁止はバージニアで奴隷，ナット・ターナーの反乱が起きた後に制定されており，東部からの奴隷の流入に州政府が反感を示した時期であったことが法制定の要因の一つである。[31] しかし，バージニアとメリーランド両州から年に250万ドル以上に相当する奴隷を購入していたルイジアナの状況を考えると，経済的な動機からの法律の制定であったと見てよい。

フランクリンはこの法的規制によって取引規模が縮小することを懸念していた。1831年の手紙には「この州の州議会はまだ会期中であり，奴隷取引を続けるための手段の全てを法によって廃止させる方向で進んでいる。我々（商人とプランター）は阻止するためにあらゆる手段を試みているがまだ成功していない……（中略）……ミシシッピ市場にのみ依存することは避けたい事態である」と言っている。[32] この記述は当時フランクリンがニューオーリンズでの取引がナチェスでの取引よりも利益を生むと見ていることが分かる。翌年，フランクリンの甥に当たるジェームス・フランクリンは「この州（ルイジアナ）では今後の奴隷業者からの奴隷の輸入に更なる規制が加えられ，州民はいかなる奴隷購入のための代理人を持ってはならないことを決定したことを知らせる。ナチェス

(29) Ballard Papers, Series 1.1, Folder 12. November 1, 1833.

(30) Ballard Papers, Series 1.1, Folder 2, October 26, 1831.

(31) ナット・ターナーの反乱のニューオーリンズ市場における影響について Judith Kelleher Schafer, "The Immediate Impact of Nat Turner's Insurrection on New Orleans," *Louisiana History* 21 (1980) 参照。

(32) Ballard Papers, Series 1.1, Folder 2, July 28, 1831.

に300人ほど我々の奴隷がいるが，叔父のアイザックのみが売却できている」とバラードに書き事態を懸念した。[33] しかし，1830年代のルイジアナ法はさまざまな抜け穴を通して徐々に破られていったため，結果的に奴隷取引規模にはそれほど大きな影響を与えなかった。この頃，ジェームス・フランクリンはナチェスに移動しており，ルイジアナでの事態を受けてナチェスでの業務の強化を目指した対応と考えられる。

ミシシッピは同様の法律を1837年の恐慌以後まで制定しなかったが，1830年代前半には反乱を起こすなど危険を及ぼす可能性のある奴隷の州内への流入を防ぐ法律が制定され，州内に奴隷を持ち込むには表1の分析史料に用いた，奴隷の反乱をおこす人格ではないということを示す証明書が必要とされた。[34] この証明書に関してはバラードの同業者でリッチモンドを拠点とする奴隷商人ベイコン・テイトがフランクリンの業者同様，東西を結ぶネットワークを持つ大業者パスカル・アンド・ラウックス社に対する手紙に，「安全を考えれば多少費用がかかるが私は友人パスカルに証明書を持参することを進める。全ての奴隷に証明書を使う必要はないが，ミシシッピの法律はそれを要求するので混乱を避けるためにも少なくとも一つは証明書を持参すべきで，一つに何人もの奴隷の名を記してもそれは許されることである」と記している。[35]

こうした法律の制定から，州政府関係者が奴隷取引への経済的依存と購入した奴隷による反乱を恐れていたことが分かる。しかし，実際の奴隷取引の規模が大幅に縮小したのは1837年の恐慌後，1840年に入ってからである。ミシシッピ州政府は1837年から1846年まで奴隷の流入を禁止し，トレーダーの多くは当初，ミシシッピ州の対応を静観していた。合法的にミシシッピに奴隷を持ち込むため，トレーダーはルイジアナに拠点を移し，ミシシッピへの売却をルイジアナで売却したように見せかける書類を発行してミシシッピ州内に移動する方法，更にはトレーダーがミシシッピに奴隷を持ち込み，自ら所有するプランテーションで1年間働かせた後，奴隷の州内在住許可を取り売却するなどの手段をとり，取引規模の縮小を防ごうとした。[36]

ここで実際バラードが西部に売却した奴隷の史料を分析する。バラードを含むフランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーは年に1000から1200人もの奴隷を移動したのが確認されているが，一回（陸路・航路両方含む）に平均して約75人から100人程度の奴隷が西部に送り出された。バラードの史料からは10月ごろから奴隷の移動が見られ，遅くは5月まで移動させていたのが確認される。これはフランクリンの業者が奴隷用宿舎を持っているため，売却シーズンの始まる前やシーズンの後でも，奴隷を滞在させる場所を確保できていたことが大きいと言える。表2はバラード

---

(33) Ballard Papers, Series 1.1, Folder 4, January 18, 1832.

(34) ルイジアナでは1828年に証明書を必要とする法律を施行した。Johnson, *Soul By Soul*, 144-145 参照。

(35) Tadman, *Speculators and Slaves*, 88.

(36) *Ibid*., 87-89.

がフランクリンと提携を結んだ初期の頃，確認できる史料をもとに船で運ばれた奴隷数をまとめたものである。

実際に売却された奴隷の分析には奴隷リストの記録が有効である。バラードが西部へ送った奴隷リストの一部には，奴隷の価格や奴隷が所有する技術についての細かな記述がある。フランクリンの手紙からも確認されるように，家内奴隷や熟練奴隷は需要が高く，より高い価格を要求した。表3は確認できるバラードのリストを元に作成した奴隷の特徴である。

奴隷の所有する特殊な能力について，バラードの売却した奴隷に関して見ると，男性奴隷では大工業，家内奴隷（サーヴァント），煉瓦職人（2種類），鍛冶業，料理人，馬丁，馬車引き，屠殺業，樽製造人などが確認できた。一方，女性奴隷では料理人，洗濯人，アイロン使用人，裁縫婦，職工などが見られ，仏語を話すことを記載されている女性奴隷も数人いた。[37]

ここまでバラードやフランクリンらの活動を中心に東西を結ぶ奴隷取引の特徴，及び1830年代初頭にバラードの取り扱った奴隷について見てきた。トレーダーが資金的にいかに奴隷を取引したかは，取引の全体像を理解する上で欠かせない重要な側面である。

取引のために奴隷を購入する際，裁判所による売却（コート・セール），つまりカウンティーの保

表2　バラードが船で西部に送った奴隷，1831-1833

船	日付	奴隷数	平均年齢	平均価格
Tribune	9/27/1831	25	19	$355.44
Lafayet	10/15/1831	32	—	$347.83
Industry	—	69	—	$361.67
Ajax	2/13/1832	45	19	$289.09
Tribune	3/19/1832	35	21	$342.04
Tribune	11/ 2/1832	41	16	$344.18
Tribune	1/28/1833	38	19	$396.05
Tribune	3/21/1833	85	18	$336.31

史料）Ballard Papers, Series 5, Volume 1-5, Folder 416-422. これらの船はニューオーリンズに着いた。陸路でナチェスに送られた奴隷の方が圧倒的に多かった。

表3　1831年から1834年にかけてバラードが西部へ送った奴隷

	平均価格	総数	熟練奴隷数（%）	熟練奴隷の平均価格
男性奴隷	$468.27	550	72（13%）	$534.68
女性奴隷	$332.52	396	36（ 9%）	$431.53

史料）Ballard Papers, Series 5, Volume 1-5, Folder 416-422.

(37)　熟練奴隷の職業については Philip D. Morgan, *Slave Counterpoint: Black Culture in the Eighteenth Century Chesapeake and Lowcountry* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1998) 第4章に詳しい。

安官，遺言検認当局による売却が，担当地域を持つトレーダーにとっては重要であった。この売却の場はトレーダーが集中するため，奴隷価格の情報や他の取引場所，奴隷の供給状況などの情報を交換する拠点となった。しかしこの司法上の売却措置で取引された奴隷数は，全体の取引の中では小さな割合しか占めなかった。それはトレーダーが，オークションで多く見られた家族単位での様々の年齢層の奴隷を一括購入するよりも，個別の奴隷を，ある特定の年齢層や技術所有者等に集中して購入することを好んだからと言われる。更に，トレーダーは信用取引で生じる多額の利子の支払いを極力避けていたため，オークションでは一般的とされていた信用取引での購入を嫌ったことも要因であった。トレーダーは早い時期での転売を念頭に奴隷を買ったため，多額の現金による購入が可能であったと言われる。フランクリン・アームフィールド社の記録も，7割近くの取引が現金決済で行われていたことが示されている。1832年から1834年にかけてのパスカル・アンド・ラウックス社の史料からは，約半分の取引が現金決済，35%が6ヶ月以下の信用取引，15%が12ヶ月以下の信用取引による決済であったことが確認されている。[38] 多額の現金決済が可能であったのは銀行からの借入れよるところが大きい。彼らが利用したローンは短期のもので，奴隷を西部で売却し利益が出るとすぐに返済するものであった。バラードを始め多くの奴隷商人はニューヨークの商人銀行，メカニック銀行，フェニックス銀行とフィラデルフィアのいくつかの銀行などで資金を運用していた。北部の都市部の銀行は南部の銀行より安定度が高く，ニューオーリンズとナチェスの銀行の短期借入れレートは，ニューヨークやフィラデルフィアでの変動に大きく影響されていたことが分かっている。[39] この信用取引のネットワークはアンティベラム期の経営を支える重要な側面であったと考えられる。

より大規模での購入となると，商人はローンの額を上げるか，引受手形を信用貸しする業者または個人に保証してもらう方法があった。プランターの作物を取り扱うファクターはプランターや商人への資金援助も彼らの業務の一つであると把握していたため，作物が市場に出回る時期が近づくと奴隷購入を支援する準備を進めていた。トレーダーへのこうした資金援助は一種の約束手形として銀行や手形引受商社によって裏書された。こうした約束手形の多くは60日から90日で全額を現金に替える事ができたが，交渉によって割引貸借が可能で，満期になる前に現金への変換が可能であった。[40]

---

(38) 現金取引について，Stephenson, *Isaac Franklin*, 78, Tadman, *Speculators and Slaves*, 103-110.

(39) 地域別の短期借入れのレートについてHoward Bodenhorn, *A History of Banking in Antebellum America: Financial Markets and Economic Development in an Era of Nation-Building* (Cambridge, Cambridge University Press, 2000) 第3，4章。

(40) Harold D. Woodman, *King Cotton and His Retainers: Financing and Marketing the Cotton Crop of the South, 1800-1925* (Lexington: University of Kentucky Press, 1968) 40-42; Richard H. Kilbourne, *Debt, Investment, Slaves: Credit Relations in East Feliciana Parish, Louisiana, 1825-1885* (Tuscaloosa: University of Alabama Press, 1995) 第2章参照。

州銀行の政策も，奴隷の価格に大きな影響を及ぼした。1832年初頭，フランクリンは一時的に業務上，ニューオーリンズからナチェスに移っていた。ナチェスの状況についてフランクリンはバラードへの手紙に，「私がニューオーリンズを出たとき，ジェームス・フランクリンに200,000ドルの換金可能な手形を残してきて，購入を続けるかどうか決めかねていた。価格は安定しており，第1級の男性奴隷で約600ドル，一般の女性奴隷で約300ドルから500ドルである。この場所の合衆国銀行とプランター銀行は大量の紙幣を循環させたため，奴隷価格は上昇した様だ。資金が必要であれば銀行から60日か90日の返済期日で借り入れればこちらから送金する[41]」と書いている。この場合のように，紙幣の乱発によるインフレが奴隷価格の上昇を招くと，多くの南部の銀行はプランターと商人に十分な資金援助を与えることが出来なかったので，トレーダーは北部の銀行を頼ったと考えられる。ルイジアナは南部内でも銀行の機能が充実していた州であったが，1830年代半ばにフランクリンはニューオーリンズから「銀行は機能していない。北部の小切手を換金しようとしたが町の全ての銀行でたったの500ドルでさえ換金しない。アームフィールドは60日の手形はどの銀行も割り引かないのでただの白紙に過ぎないと言っている」と書いていることから，南部の銀行への信用度の低下が伺える[42]。

南部は常に正貨が不足している状態であったが，特に1837年恐慌以降それが顕著になった。西部の州銀行の多くはこの恐慌で壊滅的な打撃を受け，フランクリンはバラードに「弁護士にミシシッピ紙幣は借入金の返済には受け付けられないことを知らせておくように」と手紙に記している[43]。銀行は正貨の支払いを停止せざるを得なくなり，ミシシッピは一つの銀行を除いて全てが破産するという状況に見舞われた。州内の銀行からの借り入れはほぼ絶望的となり，この状況は1840年代まで続いた[44]。

バラードが南部に移住する前の数年間は奴隷取引が停滞傾向にあったことが史料から確認できる。バラードは1836年の秋に拠点をナチェスに移し始めている。1834－35年のシーズンは奴隷取引による利益が減り，フランクリンは先に見た銀行への不信感と同時に，奴隷取引について1834年に「売上はとても低い。商人は今シーズン，仕事がないであろう。購入するための資金もなければ，市場での取引価格も低いだろう」と記していた[45]。一方，ジェームス・フランクリンはナチェスから「次のシーズンは現金不足から何も出来ないと思われる。我々はあなたとアームフィールドの借入金を支払うことしか出来ない」と記している[46]。現金不足が取引を一時的に停止し，フランクリンは「奴隷を少し売却できたが現金不足である。ここでは現金が信用力を持たなくなってきており，手形で

(41) Ballard Papers, Series 1.1 File 4, January 9, 1832.
(42) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 13, February 6, 1834.
(43) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 1.2, Folder 23, April 9, 1838.
(44) Woodman, *King Cotton and His Retainers*, 100-113.
(45) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 13, March 10, 1834.
(46) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 13, March 7, 1834.

売ったほうが良いと思った。冬に比べて約15%価格が下落した。あなたとアームフィールドが何らかの方法で短期の資金を確保できない限り，購入のための現金を確保するために今シーズンは取引を中止にする必要があるかもしれない」と書いている。[47] 彼はまた同じ夏に「次年度の業務は現金が足りなくなるため，業務を縮小することを薦める」と書き，取引に消極的な態度を示している。[48] この不況後，フランクリンは1835年を境に取引の第一線から退いていくことになる。彼のニューオーリンズでの業務は同市のファクターが後継に指名され，後のバラード・フランクリン・アンド・カンパニーの設立は彼のナチェスでの業務責任を軽減した。ルイジアナとテネシーでのプランテーション業務に専念し始めたフランクリンは1839年にはアレクサンドリアの利権を売却し，1841年には正式にフランクリン・アームフィールド社を解散する。[49]

他の問題も重なった。商人にとって奴隷が疫病にかかることは最大の脅威の一つであったが，バラードが送り出した奴隷にこの時期，コレラが広まったことが手紙から確認できる。[50] また，ベイコン・テイトがバラードを通して送る予定であった1835年度の奴隷の大量が麻疹になり，結果的に送り出せない事態が生じた。[51] ニューオーリンズやナチェスの奴隷用宿舎での疫病の流行が問題になってきたため，フランクリンは通信の中で商人が奴隷を買うときに予防接種を受けているかの確認を促す内容があった。[52]

これまで見てきたように，フランクリンとの取引業務の提携はバラードの業務を拡張させたが，資金状況や法的規制によってトレーダーは営業進展を妨げられることもあり，西部の奴隷市場はかなり不安定であることが分かった。バラードの場合，残る史料から確認できる限りでは，1820年代から1830年代にかけて奴隷取引からかなりの富の蓄積を達成したと推察できる。西部市場の不況で売上が伸びなかった年も確認されているが，全体で見ると彼は同地域の他の商人と比較するとかなり経済的に恵まれた状況にいたと言える。バラードは1836年に実行に移す以前から西部に移住することに関心を持っていたことが，フランクリンや他の西部の商人からの手紙に同封された不動産販売の広告や情報などから確認できる。富の蓄積の一方で，1834－35年度の奴隷取引額の減少などに見られる不安定さやフランクリンの業務縮小も，バラードが西部移住を決断する大きな要因になったと思われる。フランクリンと業務を提携した数年の間に，奴隷取引のみに関わる商人としての地位では資金的安定が得られないことを認識し，更に当時の南東部住民に共通する，土地所有と社会

---

(47) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 13, April 16, 1834.

(48) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 15, July 11, 1834.

(49) Stephenson, *Isaac Franklin*, 66.

(50) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 13, 17, 18 にある手紙随所にコレラの蔓延について記されている。

(51) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 18, August 2, 1834. Tadman, *Speculators and Slaves*, 107 参照。

(52) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 14, May 13, 1834.

的上昇に関する意識も働き，西部移住を決定したのであろうと考えられる。

3　西部移住――トレーダーからプランターへ――

19世紀初頭にプランターと奴隷の南西部移住が大規模に起こった要因はいくつかあげられる。先に見たように，東部での経済状況は移住への決定に大きな役割を果たした。既に17世紀末には開放された年季奉公人が，東部沿岸地域で土地所有権が確立していたためフロンティアに移住して土地を獲得するようになった。19世紀までにバージニアの住民は新たな農業方法を採用していくか，西部に移住するかを選択していた。1820年までにはケンタッキー，テネシー，アラバマ，ミシシッピとルイジアナの各州への移住が可能になり，開拓が本格化していた。1790年から1820年の間にバージニアとメリーランドの両州から250,000人以上の白人が上記の州内の新しい公有地へと移住していった。1793年以降綿花生産は飛躍し，こうした南部農業生産における変化は，移住者が西部に新たな機会を求める契機になった。(53)

1820年以降は，大規模なプランター移動はより小規模な移住者に比べて減少したと言われている。フィリップスの説では大プランターは，失うものが少なく移住の好機に即座に対応できた小規模なプランターや農民に比べて一般的に移住するのが遅かったと結論づけている。クレイヴンやオークスの研究では19世紀前半，西部移住を求めたのは小規模奴隷所有者と農民たちが中心であったと説明している。(54) これら農民と小規模奴隷所有者はヨーマン層の経済的自立を目指し，オークスによれば，彼ら移住者こそ，合理的な南部資本家として特徴付けられると説明している。(55)

バラードは1830年代後半に段階的にミシシッピ州ナチェスに移住する。彼はナチェスで，フランクリンとアームフィールド，更にフランクリンの甥で彼の業者の元で活動するジェームス・フランクリンと共に，バラード・フランクリン・アンド・カンパニーという奴隷取引業者を設立する。1840

---

(53)　長期にわたるバージニアの経済的停滞は Kulikoff, *Tobacco and Slaves*, section 1, Lois Green Carr and Lorena S. Walsh, "Economic Diversification and Labor Organization in the Chesapeake, 1650-1820," in *Work and Labor in Early America*, ed. Stephen Innes (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1991) 参照。メナードの研究によると，17世紀のメリーランド州で開放された年季奉公人が土地及び社会的に高い地位を得る確率は1690年以降は０％であった。Russell Menard, "From Servants to Freeholder: Status Mobility and Property Accumulation in Seventeenth Century Maryland," *William and Mary Quarterly* 30 (1973). 移動した白人人口と西部綿花生産については Steven Deyle, "'By Far the Most Profitable Trade': Slave Trading in British Colonial America," *Slavery and Abolition* 10 (1989), Gavin Wright, *The Political Economy of the Cotton South: Households, Markets, and Wealth in the Nineteenth Century* (New York: W.W. Norton & Co., 1978).

(54)　フィリップスの見解は Ulrich B. Phillips, *Life and Labor in the Old South* (Boston: Little Brown, 1929) による。農民の西部移住に関しては注14参照。

(55)　Oakes, *The Ruling Race*, 第２，３章。

年までにバラードは西部プランテーションでの綿花生産が軌道に乗り，ニューオーリンズを拠点とするファクター兼商人，ウィリアム・R・グローバー社のアルバート・ナルと取引を開始する。また，バラードのプランテーションの一部を共同所有していたサミュエル・ボイドも，バラードのビジネスに深く関わってくるようになる。(56)

この頃，バラードは年によっては彼の所有する7つのプランテーション全体で数千梱以上の綿花を出荷するまでになり，ナチェス地域では最大級の生産量を誇っていた。(57) これほどの生産量を維持するにはバラードも他のプランター同様，奴隷労働力に頼り，7つのプランテーションで100人近くの奴隷を所有していた。彼の所有する奴隷の購入先は決まっておらず，プランテーションが他州にも散在していたことから，その地域で活動していたトレーダーから購入していたと考えられる。1843年12月に，あるトレーダーから送られたバラードへの奴隷購入の請求書は7人の奴隷に2700ドルを支払ったことと，購入した奴隷の名前と年齢が記されている。(58) 同様の請求書は他のトレーダーからも確認できる。プランターが出荷する綿花を取り扱う商人以外の商人を通して他の物品を購入することはよく見られ，バラードの場合，バージニアにいた頃から取引をしていたケンタッキーのある商人から豚肉を購入するためだけに，西部移住後も同じ業者から仕入れていたことが分かっている。(59)

バラードは西部移住後もリッチモンドを拠点とするトレーダーとの関係を保持した。中でもベイコン・テイトとアルソップ親子との関係は西部でのバラードの奴隷取引業の展開を考える上で重要である。バラードと比較するとテイトやアルソップ親子は同じリッチモンドを拠点とするトレーダーであっても異なる方向に事業を展開した。彼らはバラードと異なり，バージニア州に留まり，様々な経済活動に関わっていったが，史料の分析では奴隷取引業への関わりが彼らに多くの富をもたらしていたことが伺える。

テイトは1830年代初頭に同じくリッチモンド在住のトーマス・ボールダーと業務を提携し，テイト・ボールダー・アンド・カンパニーを設立する。この業者の規模はバラードが1820年代にアルソップと提携して設立していた業者と似ており，主に同地域の奴隷を集めて東西のネットワークを持つ業者に売り渡していた。バラードとフランクリンのパートナーシップが軌道に乗りだすと，テイ

---

(56) サミュエル・ボイドはナチェスの裁判官で，バラードの親しい友人となり，プランテーションの共同経営者となる。バラードのファクターと並び，1840年代以降プランテーション経営者としての，バラードにとっては欠かせない人物となる。

(57) バラードが所有した7つのプランテーションはそれぞれ Magnolia, Wagram, Elcho, Karnac, Laurell Hill, Golden Plains, Outpost と名づけられ，ルイジアナ，ミシシッピ，アーカンソー各州に散在していた。

(58) Ballard Papers, Series 1.3, Folder 67, December 18, 1843.

(59) Ballard Papers, Series 1.3 にケンタッキー州ルイヴィルのアダムス・アンド・アンダーソン社との取引を示す史料が数多く見られる。

トの業者はバラードの元に奴隷を集め，フランクリンのネットワークを利用して西部への売却を委託するようになった。同様の傾向はバラードとアルソップ親子の関係にも見られ，他にもバラードに売却を依頼するトレーダーが急増した。バラードの，奴隷を西部へ売却する代理人の役割は彼が西部に移住してからも続いた。つまり，バラードはリッチモンドでフランクリンと業務提携をした時点から，テイトら他のトレーダーとは役割の異なる優位な地位にいたことになり，他のトレーダーが集めた奴隷が，彼のところに集まるようになっていた。西部とのネットワーク，更にリッチモンド近辺の奴隷商人との連携を確立したバラードは，フランクリンと同じように西部に住み，プランテーション経営をしながら，このネットワークを利用して東西を結ぶ業者兼プランターになる方が経済的に有益であると考えた。フランクリンを手本としたバラードの元には，早くはナチェスに拠点を移した直後の1836年に，テイトの業者からの奴隷が送られてきたことが確認されている。[60] また，バラードは西部に移住してバラード・フランクリン・アンド・カンパニーを設立後，従来のフランクリンの業者の元にいた商人に加え，ミシシッピ州を中心に多くの奴隷商人を雇い始めている。

バラードのナチェスでの奴隷取引業務は当初から大規模なものであった。1830年代後半に低南部を旅した元新聞編集者のジョン・ウィリアムソン・クレイリー・ジュニアはその手記に「ナチェスの中心，２分の１マイルの間に奴隷商人の大きな空き地や施設が集中していた。バラード，フランクリン，ウッドフォークといった商人がナチェスの奴隷市場へ奴隷を供給しており，これらの商人の庭に一度に1500人もの奴隷がいたのを私は見た」と記している。[61] こうした手記はバラードとフランクリンの取引規模が巨大であったことを示すが，先に見たようにミシシッピでは1837年の恐慌以降法律上，奴隷の輸入を禁止しているので，バラードはルイジアナを通じて，または自身のプランテーションで奴隷を活用しながら売っていた可能性もある。恐慌直後はナチェス市場での小規模業者の撤退が相次ぎ，ミシシッピのウィリアム・ライヴスはバラードに1838年に「グランド湾銀行の小切手をバラード宛てで転送しようと思っていましたが，売上の期待を下回り，支払いが出来なくなりました。過去10日間では奴隷は１人100ドルも価格が下落し，下落傾向は止まりません。12も奴隷取引業者とトレーダーが倒産し，競争相手が減ったため今後は安全で有益な購入がより頻繁に行われると思います」[62] と手紙に記している。恐慌による競争相手の撤退，フランクリンのネットワークの利用，及びプランテーションでの綿花収入によりバラードの経営は恐慌後も比較的安定していた。

バラード文書には1820年代から30年代を通じて，テイトとバラードの通信が多く見られる。それらを見る限り，テイトは奴隷取引を，彼の多岐にわたるな経済活動の中でも最も重要な活動と位置

---

(60) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 18, September 23, 1836.

(61) John Williamson Crary Jr., *Reminiscences of the Old South: From 1834 to 1866*. Southern History and Geneology Series Vol.1 (Pensacola: The Perdido Bay Press, 1984) 44-45.

(62) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 22, March 18, 1838.

付けていたことが分かる。彼は西部での奴隷取引が停滞中であった1838年，バラードに委託商人とオークション業にも手を伸ばすことを考えていることを手紙に記した。[63] テイトはまた別の手紙にミシシッピ州政府が奴隷の輸入を禁じた上に，1833年5月以降の奴隷の流入も全て違法であると宣言したことの行方を懸念していた。[64] ミシシッピでは奴隷取引で生じた負債は全て返済を放棄され，1833年から1837年までの奴隷売却の手形は全て無効とされた。ナチェス市場では小額の支払いで奴隷を買い，収穫後の決済により信用取引による売却が比較的多かったため，恐慌後はこの回収にトレーダーは苦労した。小規模業者であったテイトの場合はかなりの資金を失ったと考えられる。[65]

テイトが農場経営をしていた形跡はバラードとの通信では確認できないが，一方の事例のアルソップ家はプランター兼商人であった。彼らはいくつかの農場で奴隷も所有しており，更にリッチモンドで飲食関係の商店を経営していたことも分かった。[66] 彼らは元々農業生産のみに従事していたようだが，1820年代にはバラードと同様に奴隷取引に関わっていき，サミュエル・アルソップがバラードと業務提携をした。

テイトもアルソップ親子も1830年代後半以降は奴隷売却の支払い不足分を回収するのに，多くの困難に直面した。それは，バラードの下で働くミシシッピのトレーダーたちから，バラードに奴隷売却が思わしくないため，請求分を回収できない旨の手紙が多くあることから分かる。アルソップの奴隷をブレルという人物に大量に売ったときにアルソップが売却の不足分を集められず，バラード宛ての手紙に「奴隷売却の収入の7分の3は私，7分の4は父の収入になる。1年までなら不足分の支払いを待ちますが，現在支払われていない分は10パーセントの利子を加算してください」と，売却を依頼した奴隷についての処置を申し出ている。[67] 同じ手紙に彼は農作物の状況について触れ，「この夏は小麦に少し助けてもらった。60ブッシェルしか植えていないのに600ブッシェル生産し，$1.40から$1.50で売ることが出来た」と述べている。また同じく1839年1月にブレル氏の借金について再び触れ，「ブレル氏の手形の件ですが，回収できる分だけ回収して下さい。低南部に資金があるよりは近く置いておきたいので，こちらに送金してください」とあり，回収の遅れがアルソップの資金繰りに影響を及ぼしていたことが伺える。[68]

当初アルソップ親子は農場経営もあることから，奴隷取引への依存傾向は高くはなく，テイトほ

---

(63) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 20, January 1838 の二つの手紙に記載されている。Tadman, *Speculators and Slaves*, 87 も併せて参照。

(64) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 31, January 1840.

(65) ミシシッピの信用取引に関して，Tadman, *Speculators and Slaves*, 105, Stephenson, *Isaac Franklin*, 61-65.

(66) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 21, February 10, 1838 のバラード宛ての手紙にアルソップの奴隷取引以外の活動について記されている。

(67) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 25, November 22, 1838.

(68) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 26, January 18, 1839.

ど奴隷売却状況に左右されてはいなかった。しかし，1838年にアルソップ家は商店を売却し，翌1839年には土地の一部を売却するなど，徐々にビジネスを縮小し始めている。そうした状況もあり，アルソップ自身が所有する奴隷の売却を1830年代後半にバラードに依頼し始めた。

ジョン・アルソップは1839年に「父は今でも所有する奴隷の一部を売却することを話しています。作日は次の冬には少なくとも30人のとても状態のよい奴隷を送り出すといっていました」と書いている。(69) 同じ年に，サミュエル・アルソップはバラードに「私は南部市場に私の所有する奴隷の一部を売却することを考えている」と手紙を書いている。(70) 実際，その年にサミュエル・アルソップは奴隷を西部に送っており，この決定は手紙の分析から農業収入と関連していた可能性があることがわかる。翌1840年，ジョセフは「父は今の時点では奴隷を送り出すことを思いとどまっているようだ。父自身は今年も売るといっているが，私は疑わしく思う，（なぜなら）昨年は農作物が豊作だったので奴隷を売る必要性がない」と書いている。(71) この文面を見ると奴隷売却の決定は前年の農作物収入と関連していたことがわかり，プランター経営にとって奴隷売却は全体の収入レベルを均衡させるための手段であったとも考えられる。

テイトやアルソップの例はバラードの例と比較すると，対照的な展開を示していることが分かる。バラードが，西部とのネットワークを持つことで，テイトやアルソップより奴隷商人としてより高い地位に就くことに成功したことが，その後の決定的な違いとなったと言える。

19世紀には商人，ファクターとトレーダーは，富裕なプランターと同程度の富を所有しても社会的に同等とは見されなかった。(72) 商人という職業だけでは個人は高い身分とはみなされなかった。規模が大きく収入の多い商人はプランター兼奴隷所有者であることが多く，バラードが西部に移住して求めた地位はこのような地位であったといえる。西部の綿花栽培地で最も成功を収めていた者はこのパターンが多く，ファクターと商人とプランターの区別は難しかった。例えば，エドワード・リチャードソンはニューオーリンズの巨大なファクター業者ソーンヒル・アンド・カンパニー社のパートナーであったが，ミシシッピに大綿花プランテーションを所有しているプランターでもあり，奴隷取引にも関わり，フランクリンと同様のパターンであったことが確認されている。(73) 同様の例は西部綿花地帯に多く見られ，このような商人は経済的に安定し，地位も他の商人より高かったこと

---

(69) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 26, April 7, 1839.

(70) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 28, August 28, 1839.

(71) Ballard Papers, Series 1.2, Folder 32, March 16, 1840.

(72) アンティベラム期のトレーダーの地位について，Tadman, *Speculators and Slaves*, 第7章参照。西部での社会階級についてはMoore, *The Emergence of the Cotton Kingdom* 参照。プランターが商業活動に関わることで経営能力を高め，社会的上昇への要求を満たしていく例はDrew Gilpin Faust, *James Henry Hammond and the Old South: A Design for Mastery* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1982) に見られ，特に第6章と第3部に詳しい。

(73) Woodman, *King Cotton and His Retainers*, 第4，8章。

から，バラードはその地位を切望して西部への移住を決意したと考えられる。

1850年代以前の南部では富の蓄積によって社会的上昇を実現することが可能であった。農民はヨーマン層から奴隷所有層に入ることが可能であったし，小規模奴隷所有者から中規模所有者へ成長していくこともよく見られた。その一方で，奴隷所有層から非奴隷所有者になることもあった。拡大する奴隷経済は西部移住・土地所有と社会上昇を重ねた世界観を作り上げ，オークスの言う小規模で合理的な資本家農民はこの世界観を持ちながら，1820年代以降に移住性を高めた。[(74)] アンティベラム期の南部では多くの男性は移住を成功への手段の一つとして認識し，バラードもこの世界観を持っていたと考えてよい。商人の地位の低下と奴隷取引の停滞，フランクリンによる奴隷取引縮小などの要素が絡み，1830年代後半が西部移住の好機であるとバラードは判断した。似た立場のアレクサンドリアのアームフィールドが，フランクリンが事業を縮小しアレクサンドリアから撤退した1841年以降，資産の売却，債務の支払い，支払い不足分の収拾に奔走し経済的に停滞したことを考えると，バラードはアームフィールドよりも地元商人との強いネットワークと土地所有者階層への執着があったのではないかと考えられる。[(75)] バラードが独身である一方，アームフィールドには家族関係や地元親族との関係など，彼がバラードのように西部移住をしなかった要因を他にも考慮する必要があるであろう。[(76)] テイトやアルソップはバージニアに留まったが奴隷取引への加担は続けていた。バラード文書の個々の事例は，奴隷取引がそれぞれにとって重要な経済活動であり，その取引への関わりが経営方針や態度に大きく影響したと考えてよい。とりわけバラードの場合は奴隷取引に関わることで西部移住への道が開けたことが特徴的であった。

結　論

地域内奴隷取引は植民地時代からアメリカ経済と社会に重要な役割を果たしてきた。植民地時代のバージニアとチェサピーク湾岸地域は，その経済的特徴と社会的環境のため奴隷供給地域になる要素を既に持っていた。西部開拓地の開放，アフリカからの奴隷の直接輸入の禁止，東部州での奴隷人口の過剰などが要因となって奴隷取引が発展し，専門の奴隷取引業者が登場した。奴隷取引業は19世紀初頭には一般的な職業となり，その有益性から，多くのプランターや商人が本格的に加担するようになった。1820年代までに，フランクリンの業者のような大規模な奴隷取引業者が東西の都市部に設立され，大業者は多くの専門トレーダーや小規模業者とパートナーシップを結び，取引

---

(74) Moore, *The Emergence of the Cotton Kingdom*, 116-118., Oakes, *The Ruling Race*, 第2，3章。

(75) Stephenson, *Isaac Franklin*, 67.

(76) Joan E. Cashin, *A Family Venture: Men and Women on the Southern Frontier* (New York: Oxford University Press, 1991) は，19世紀初頭の西部移住の決断に血縁・家族関係，ジェンダー等の要素が与えた影響を検証している。

のネットワークを築いていった。毎年大量の奴隷が活発な市場で取引されていたため，奴隷所有者は奴隷取引が作り出した社会経済圏内に必然的に入らざるを得なかった。奴隷市場は東部と西部両方の経済状況に左右される一つの全体市場と考えられ，農業生産が多様化し，階級や地位の分離がより明確になっていく社会において，異なるレベルの南部住民にそれぞれ違った形で影響を与えていたと言える。

東部から西部へ移住したある特定の奴隷商人の分析は，この時代の多くの変化の要素を象徴的に示している。史料の分析から，バラードはリッチモンドにいた頃に奴隷取引で十分な富を蓄積し，裕福な綿花プランターに転身したことが明らかになり，それは東西の奴隷商人を結ぶ大ネットワークに入ることでより経済的に安定した地位に就くことができたことを示している。バラードのケースで特筆すべきは，他の西部移住者同様，経済的利益と安定，更に社会的地位を求めて西部に移住するが，彼は東部在住中に築いた西部ネットワークや東部商人への優位な立場を移住後も維持し続けることができた点である。バラードの例は単にトレーダーからプランターへの転身ではなく，トレーダー兼プランターという地位に上昇したという点も重要である。

この文書に登場する奴隷商人たちは経済的成功を求めてさまざまな異なるパターンを辿ったことが分かった。ジョン・アームフィールドはフランクリン・アンド・アームフィールド社解散後，アレクサンドリアに留まったが長年の請求分の回収に追われることになる。アルソップ親子やベイコン・テイトもバージニアに留まり様々な経済活動に関わったが，バラードの元での奴隷取引はバラード西部移住後も続いた。1830年代後半にはアルソップ親子は奴隷売却を農業収入の減少分を補うために行っていたこともわかった。彼らにとって奴隷取引は有益性のある活動であったが，バラードは文書に登場するどの奴隷商人よりも恵まれた例であった。バラード文書の事例は，南部奴隷取引が西部に大量の奴隷を送り出す役割を果たした上，奴隷，プランターやトレーダーだけでなく，一般農民やヨーマン層，金融機関や州政府政策など南部のあらゆる要素を含めて西部の発展に寄与していたことを示していると言える。

付表　文中の奴隷商人

ジョン・アームフィールド（John Armfield）

バージニア州アレクサンドリア在住の奴隷商人。ニューオーリンズのアイザック・フランクリンとともにフランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーを設立する。アイザック・フランクリンとは婚姻で親戚関係（義理の甥）になる。のちバラードがナチェスを中心に設立するバラード・フランクリン・アンド・カンパニーの共同経営者になるが，1841年までにはフランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーは解散し同社のアレクサンドリアの拠点は売却する。

サミュエル・アルソップとジョン・アルソップ（Samuel and John Alsop）

ジョンはサミュエルの息子である。アルソップ家はバージニア州スポッツィルヴェニア・カウンティーのヘイゼルウッドに住み，奴隷取引に関わるほか，いくつかのプランテーションを経営するなど多様な活動を行う。サミュエル・アルソップは1820年代にバラードと奴隷取引において業務を提携し，主にバージニアとノースカロライナの両州で西部へ送るための奴隷の購入に従事した。のちバラードがフランクリンの業者のパートナーになると，バラードとフランクリンの西部ネットワークを通して奴隷の売却を依頼するようになる。この関係はバラードが西部に移住してからも続く。主な農作物は穀物で，プランテーションで所有する奴隷の売却も行っていた。

ベイコン・テイト（Bacon Tait）

バージニア州リッチモンドを拠点する奴隷商人。1830年代初頭に同じくリッチモンドで取引していたトーマス・ボールダーとテイト・ボールダー・アンド・カンパニーを設立する。リッチモンド市場においてはバラードの競合相手であったが，バラードがフランクリンのパートナーになってからは彼のネットワークに売却を依頼し，バラードが西部に移住した後もバラードとは緊密な関係を継続する。

ライス・C・バラード（Rice C. Ballard）

バージニア州リッチモンドを拠点とする奴隷商人。個人トレーダーとして奴隷取引にかかわり始め，やがてアルソップと業務提携し取引規模を拡大する。のちフランクリンの業者とパートナーシップを結び，西部への奴隷輸出経路を確立するとアルソップやテイトの業者など，リッチモンドの多くの奴隷商人がバラードの西部ネットワークに売却を委託するようになる。1830年代後半にミシシッピ州ナチェスに移住し，アイザック・フランクリン，ジョン・アームフィールド，ジェームス・フランクリンとナチェスでバラード・フランクリン・アンド・カンパニーを設立し，プランター兼奴隷商人として成功する。

アイザック・フランクリン（Isaac Franklin）

ニューオーリンズ在住の奴隷商人兼プランター。プランテーションはルイジアナとテネシーの各地に散在する。フランクリン・アームフィールド・アンド・カンパニーを経営し，リッチモンド在住のバラードと業務を提携後，バラードのビジネスへの姿勢に大きな影響を与える。しかし，1830年代後半には取引の第一線から退き，1841年にはアレクサンドリアのルートを解散する。

ジェームス・フランクリン（James Franklin）

ミシシッピ州ナチェス在住の奴隷商人。アイザックの甥にあたり，ナチェスに来る前はニューオーリンズでアイザックの元で業務を行っていた。バラード・フランクリン・アンド・カンパニーの

共同設立者の一人。

（ノース・カロライナ大学チャペルヒル校歴史学研究科・院生）